

詩篇 129 篇

都上りの歌

《虐待の記憶》

- 1 「彼らは私の若いころからひどく私を苦しめた。」さあ、イスラエルは言え。
- 2 「彼らは私の若いころからひどく私を苦しめた。彼らは私に勝てなかった。
- 3 耕す者は私の背に鋤をあて、長いあぜを作った。」
- 4 主は、正しくあり、悪者の綱を断ち切られた。

《敵対者の扱い》

- 5 シオンを憎む者はみな、恥を受けて、退け。
- 6 彼らは伸びないうちに枯れる屋根の草のようになれ。
- 7 刈り取る者は、そんなものを、つかみはしない。たばねる者も、かかえはしない。
- 8 通りがかりの人も、「主の祝福があなたがたにあるように。主の名によってあなたがたを祝福します」とは言わない。

120 篇：カナンの地の外に住む者の歌

121 篇：巡礼の旅の歌

122 篇：エルサレム神殿到着の歌

123-133 篇：祭で歌われる祈り

134 篇：帰路に着く者への祝福の祈り

本篇の冒頭を読んでまず目に留まるのは、1 節と 2 節で「彼らは私の若いころからひどく私を苦しめた」(רַבַּת צָרוּרֵי מִנְעוּרַי) というフレーズが一言一句変わらず繰り返されていることです。これを見て思い起こす箇所があるかもしれません。そう、124 篇の書き出しです。

- 1 「もしも主が私たちの味方でなかったなら。」さあ、イスラエルは言え。
- 2 「もしも主が私たちの味方でなかったなら、人々が私たちに逆らって立ち上がったとき、

(124:1-2)

このように同じことばを反復することで、著者の思いは読者の心に刻まれ共感を呼ぶものとなります。それにしましても、本篇の「彼らは私の若いころからひどく私を苦しめた」とは、何と苦々しい記憶でしょうか。「私」とはイスラエルを擬人化した表現、「若いころ」とはイスラエル民族の歴史の初期の時代のことを指していますから、エジプトでの奴隷生活を回顧していると思われる。

3節の「耕す者は私の背に鋤をあて、長いあぜを作った」というフレーズは、比喩とはいえ字義通りに読むとひどい虐待の記録とも取れてしまいます。人の背中を鉄製の農具で傷つけるような痛ましい表現です。おそらくこれは、エジプトで鞭打たれた人々の苦しみを、耕された畑の畦として示したのでしょう。この先祖の経験は、後の時代にも捕囚においてある程度再現されました。著者は直近の歴史をも振り返りつつ、この記事を書いているのでしょう。

しかし、神はどのような時代にも悪の力を打ち破り、神の民を苦しみから救い出してくださいませ。「主は、正しくあり、悪者の綱を断ち切られた」（4節）とは、縄目から解放された喜びを表しています。

5節以下では、敵対者への呪いのことばが連呼されます。その中でも印象的なのは、6節の「彼らは伸びないうちに枯れる屋根の草のようになれ」という表現です。土が薄く日照りの強い屋根に植わった草は、根も伸びることなく枯れてしまいます。そのように、悪しき者は一時的に栄えるけれど、その活動期間は短いことを言い表しているのでしょう。栄枯盛衰の世、今は世界最強を誇る国も、いつまでもそのままいられるわけではありません。大小の社会にあって、神に対して不誠実に生きている者は生き残ることができないのです。

「主の祝福があなたがたにあるように。主の名によってあなたがたを祝福します」（8節）とは、神の民が互いに交わす挨拶だったのでしょ。これはまさに「投げかけてほしい」ことばです。しかし、「シオンを憎む者」（5節）はその祝福にあずかることができません。イスラエル人にとって「祝福を受ける」ことは、その人の人生において最も重要なことであり、ヤコブが兄を騙してでも父親の祝福を奪い取ったことにも表されています。信仰者たる者、神の祝福を侮ってはなりません。毎週礼拝で受ける神からの祝福を全身で受け留め、「祝福された者」として世に遣わされていきたいと思ひます。